

## 令和元年度学長戦略経費（重点分野研究プロジェクト）進捗状況報告

（令和 2 年 3 月）

報告者氏名・所属	津田 拓郎・旭川校		
研究プロジェクトの名称	中学校における前近代西洋史教育の再構築に向けた国際比較研究		
プロジェクト担当者 (氏名・所属・職) ※代表者に●を付すこと	●津田 拓郎・旭川校・准教授 稲葉 浩一・旭川校・准教授 森 悠人・旭川校・大学院生・明星高等学校教諭(2020年3月迄)・六合中学校教諭(2020年4月より)		
研究プロジェクトの概要等（期間全体）			
本研究は、高等学校における「歴史総合」必修化に伴う中学社会歴史分野における前近代外国史教育の重要性増大を念頭に置き、道内及び国外の中等教育(特に中学校相当)における前近代外国史教育の現状と課題を分析し、限られた授業時間の中でグローバル化の時代に適合した世界史像を教育できるような授業開発を行うものである。研究代表者は西欧中世史の専門家であり、社会調査の専門家が研究分担者としてプロジェクトに加わるほか、ドイツのギムナジウムで教鞭を取る歴史教諭の協力をも仰ぐことで、先行研究とは全く異なる形の大きな成果が期待できる。			
進捗度	1	← 番号を記入 1. 順調に進んでいる 2. ほぼ順調に進んでいる 3. やや遅れ気味 4. 遅れ気味	
研究実績の概要（当該年度）			
今年度はすべて当初の計画通りに研究を進めることができ、次年度以降のさらなる展開のための基盤も確立された。また、複数の学会・研究会・講演会で成果を発表するとともに、研究論文も作成するなど大いに充実した実績を積むことができた。以下にその詳細を記す。			
<p><b>1) 研究成果の発表</b></p> <p>プロジェクトメンバーの<b>森悠人が中学校歴史教科書の分析結果を学会で発表し</b>、道内の大学教員および高等学校教諭、北海道大学の大学院生やポスト・ドクターらと意見交換を行った。ここでの議論の成果は、森および研究代表者による<b>学術論文の形で今年度末に刊行される</b>(脱稿済み、3月末日刊行予定)。刊行と同時にオープンアクセス化される<b>本論文を通じて、本プロジェクトの問題関心が広く知れ渡ることとなる</b>。</p> <p>研究代表者は、<b>広島大学におけるシンポジウムでの研究成果の発表、立教大学におけるウィーン大学教授による講演へのコメント(英語)、札幌英藍高校での講演</b>を行った。これらはすべて、代表者が長年取り組んできた西欧初期中世史研究の成果を学校教育(特に中学校・高等学校における外国史教育)とどのように接合すべきかという論点を含むものであり、日本史や東洋史を含む歴史学者や、海外の最先端の研究者、初等・中等教育に携わる教諭といった、さまざまな属性の人びとと、広く意見交換することができたことは大きな収穫であった。ウィーン大学教授との意見交換においては、<b>世界史すべてを網羅的に扱う現状の日本のカリキュラムが世界的に見ても大きな独自性を持つ内容であるという点を自覚</b>することができた。また、各種講演を通じて現場の教諭との接点が生まれたことで、<b>次年度以降の現場をも巻き込んだ共同研究をどの程度の規模でどのような形態で行うべきか</b>といった点について、<b>明確なプランを描けるようになった</b>。</p>			

## 2) ドイツ(ブラウンシュヴァイク)における打ち合わせおよび教科書調査

2020年2月下旬に、研究代表者および森悠人の2名がブラウンシュヴァイク(ドイツ連邦)の国際教科書研究所を訪問し、日本における中学校相当の学年におけるカリキュラムを中心に、各国の中等教育課程における歴史教科書(特に日本における中学校相当)の調査を行った。主として森が英語圏の教科書を担当し、津田がドイツ語圏とフランス語圏の教科書を調査した。調査においては**多数の教科書をPDFのかたちで収集し、次年度以降の本格的な内容分析のための準備が整った。**現段階でもすでに、英語圏の教科書のなかでもオーストラリアにおける歴史教育課程が、通史、(自国以外の)一国史およびトピック重視のグローバル・ヒストリーを融合させた、極めて興味深いものであることが明らかになっている。また教科書研究所の研究者との情報交換のなかで、**世界各国の教育課程および教科書に関するデータベースを活用した調査・研究の可能性**を発見することができた。初年度の調査により、国際教科書研究所には教科書やカリキュラムの情報のみならず、教育手法に関する文献や指導案の類も豊富に所蔵されているなど、当研究所が当初のわれわれの予想を遙かに超える形で研究環境が充実していることが明らかになっている。こうしたことから、次年度以降、現職の教諭をも伴って当地を訪れることで、さらなる成果が得られるとの見通しを得ることができた。

教科書研究所での調査に続いて、ブラウンシュヴァイクにおいて、ドイツのギムナジウム(日本における小学校5年生～高校3年生に相当)で教鞭をとる、コンラート・フレンツェル教諭との研究打ち合わせを行った。当初はフレンツェル教諭への「聞き取り調査」を行う予定としていたが、本研究においてフレンツェル教諭は「聞き取り」の対象ではなく「共同研究者」としての位置づけとすべきであるとの考えから、「研究打ち合わせ」の形をとることとした。打ち合わせの内容は極めて多岐にわたるため、そのすべてをここに記すことはできないが、ドイツにおける教育課程が州ごとに特色を出したものになっていることの功罪や、往々にして理想化されて伝えられることの多いドイツの教育改革(特に近年進められている「コンピテンシー」重視の教育方針)に対して、現場の教師の中には極めて強い批判が存在することなど、現場で働く教師からしか引き出せない重要な情報を得ることができた。また、今後研究プロジェクトが継続できた場合の具体的工程についても話し合わせ、1)フレンツェル教諭が**ドイツの教諭に対して聞き取り調査を行うこと**、2)次年度中にまず日本語で**国際共著論文を刊行**し、その後英語ないしドイツ語でも共著論文を執筆すること、3)次年度およびその翌年に**日本およびドイツの双方で現場の教諭による授業見学**を行うこと、4)フレンツェル教諭の来日時に**日本の学校教諭や歴史学者を前に研究代表者と連名で研究報告**を行うことが決定した。こうした取り組みが実現すれば、本研究プロジェクトの終了後にまで継続可能な形で、**現場同士の国際的なネットワークが構築されることとなる**。

## 3) アンケート調査の実施

研究代表者は中学・高校における外国史学習の実態を知るため、本学の2年生全員を対象にアンケート調査を行い、その調査結果をもとに3名の学生をピックアップして個別の聞き取り調査を行った。調査の内容は、学生が世界史に興味を持つ(または興味を失う)に至ったきっかけを探るというものである。この調査自体は本プロジェクトとは異なる科研費事業の補助を受けて実施されたものであるが、ここから明らかになる知見は、本研究プロジェクトでも活用される。なお、本調査に際して、研究分担者である稲葉が調査手法の設計において重要な役割を果たしたことも付記しておきたい。

### 今後の研究プロジェクトの推進計画

本研究計画はさしあたり1年のプロジェクトとして採択されたものであるが、次年度以降もプロジェクトの継続が認められた場合、以下の形で研究を進めていくことを計画している。

- ・次年度(プロジェクト2年目)：詳細は様式3を参照
  - ・各国の歴史教育のカリキュラムおよび教科書のあり方の分析を継続して進める
  - ・各種学会・シンポジウムにおいて研究成果を発表する
  - ・引き続きフレンツェル教諭との共同研究を進め、2020年度中に国際共著論文を刊行する
  - ・8月ないし2月にブラウンシュヴァイクの教科書研究所を再訪するほか、同じく8月ないし2月にフレンツェル教諭を北海道に招聘し、代表者と連名での研究発表を行うとともに、道内の中学校において授業見学を行う
- ・プロジェクト3年目
  - ・7月末に中学校ないし高等学校の教諭とともにフレンツェル教諭の勤務するギムナジウムにおいて授業見学を行い、広く意見交換を行う。
  - ・フレンツェル教諭との共同研究の成果をドイツにおける歴史教育学会において発表し、その内容に基づいて英語ないしドイツ語での国際共著論文を執筆する。
  - ・研究成果に基づいて現行のカリキュラムに対する具体的な提言を行うとともに、現行のカリキュラムのなかで授業を行わざるを得ない現場の教師のために、現場と密接に連携したうえで具体的な形での授業開発を行う。
  - ・プロジェクト終了後も持続可能な形で、道内の教諭とドイツの教諭の間を結ぶネットワークを構築し、地域の国際化に結びつくような学びの場を作り出す。

### 教育現場や地域で活用可能な成果等

- ・道内の教諭とドイツの教諭の間を結ぶネットワークを構築することで、地域の国際化を実現しつつ、ステークホルダーの意見をも取り入れた形で、地域に貢献する人材養成につながるような学びの場を生み出す。
- ・中等教育課程における歴史教育の改革が進む中浮かび上がっている課題を、他国の事例をも踏まえたうえで、現場における実践ベースで再検討する作業を通じて、グローバル化に対応したカリキュラムの開発・提言を行う。
- ・道内中学校教諭の協力の元、他国の実践事例を踏まえたうえで、現行のカリキュラムの枠内でも実践可能な授業開発を行い、オープンアクセス可能な論文の形で公開する。

### 研究成果の公表実績(当該年度)

#### 【著書】

#### 【学術論文】(投稿中も含む)

- ・森悠人・津田拓郎「中学校歴史教科書における中世とルネサンスの扱いについて」『史流』第47号、2020年、63-86頁。
- ・津田拓郎「8・9世紀アフロ・西ユーラシア世界におけるカロリング朝フランク王国」『史学研究』306号(予定)、2020年、掲載頁未定(依頼原稿、2020年3月脱稿)。

#### 【学会発表、シンポジウム、セミナー、演奏会、展覧会、競技会、普及啓発イベント等】

- ・森悠人「中学校歴史教科書における中世とルネサンスの扱いについて」『第62回北海道教育大学史学会大会』2019年9月7日、北海道教育大学札幌サテライト、参加者15名。
- ・津田拓郎「8・9世紀西ユーラシア世界における周縁と秩序(シンポジウム：ユーラシア世界における周縁と秩序)」『広島史学研究会大会』2019年10月26日、広島大学、参加者約100名。

<ul style="list-style-type: none"> <li>• Takuro TSUDA, Comment as a discussant to Johannes Preiser-Kapeller, Volcanoes, plagues and cherry blossoms. Entangled ecologies of early medieval Afro-Eurasia, 500-900 CE, 『連続講演会：環境史から見た中世グローバルヒストリー』2019年11月22日、立教大学、参加者15名。</li> <li>• 津田拓郎「8-9世紀アフロユーラシア世界におけるフランク王国—前近代世界史教育における西欧中心史観からの脱却に向けて—」『第57回北海道高等学校教育研究会世界史部会』、2020年1月9日、札幌英藍高等学校、参加者30名。</li> </ul>	
【テキスト、報告書、研修資料等】	
添付資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 『史流』校正用表紙・校正原稿</li> <li>• 北海道教育大学史学会プログラム・配布資料</li> <li>• 広島史学研究会大会プログラム・配布資料</li> <li>• 『連続講演会：環境史から見た中世グローバルヒストリー』ホームページおよびプログラム・コメント原稿</li> <li>• 北海道高等学校教育研究会プログラム・配布資料</li> </ul>
ダウンロード可能なドキュメント	
関連URL	
問い合わせ先	氏 名：津田 拓郎 電 話：0166-59-1279 E-mail：tsuda.takuro@a.hokkyodai.ac.jp